

沿岸技術研究センターに期待すること



吉永 宙司

一般財団法人港湾空港総合技術センター
業務執行理事

私は令和4年7月1日付で国土交通省を退職、現在は一般財団法人港湾空港総合技術センター（SCOPE）で業務執行理事として勤務しています。

これまでの沿岸技術研究センター（CDIT）との関係は、旧運輸省と国土交通省に勤務していたときに発注者として、技術検討委員会などを設置して検討を進めるいくつかの業務でかかわりがありました。代表的な業務について紹介したいと思います。

平成11年4月から同13年1月までの第一港湾建設局新潟調査設計事務所時代は、新潟港海岸の面的防護工法に関する検討業務が印象に残っています。面的防護工法とは、海岸浸食対策において潜堤・突堤・養浜を組み合わせる海底地形変化を抑える工法で、新潟港海岸は昭和から令和まで続く息の長い事業になりました。

その後、省庁再編以降では平成18年7月から同20年3月までの北陸地方整備局新潟技術調査事務所時代と、平成26年10月から同29年7月までの北陸地方整備局港湾空港部時代に福井港海岸の背後地防護や、伏木富山港新湊大橋の設計に関する検討業務などにかかわりました。福井港海岸では冬季波浪による護岸前面の侵食対策や護岸背後の液状化・吸出し防止対策として、離岸堤整備や護岸改良について検討しました。新湊大橋は航路により分断された新湊地区の東西地域を結ぶとともに、地域のランドマークとなる全長3.6km、主橋梁部延長600mの5径間連続複合斜張橋です。取り上げた業務すべてが北陸地方の案件という極端に偏ったCDITとの関係でしたが、私にとっては貴重な経験をさせていただいたと感じています。

また、平成23年7月から同24年9月までと期間は短かったものの、CDIT研究主幹として出向していたこともありました。

その時は整備局などから受注した業務のマネジメントを主に担当していたのですが、特に民間企業から出向してきた研究員の皆さんが気持ちよく仕事してもらえるよう、ほとんどそれだけを考えていたような気がします。CDIT職員間の意思疎通やお付き合いなどに全力を尽くした出向期間でした。

さて、これからのCDITに期待することについて、私を感じていることを僭越ながら申し上げます。

私自身、現役時代は整備局での勤務が長かったこともあって実感しているのですが、ここ20年ほどで直轄を取り巻く状況が大きく変化しました。職員数の減少、とりわけ30代の層が薄くなっていることや、防災や老朽化する施設への対応に加えてカーボンニュートラルやDXといった新たなニーズへの対応など業務の複雑化が進んでいることなど、これらの状況変化を背景に直轄としてこれまで普通にやってきたことが実現困難になりつつあります。直轄の強みであった技術力を蓄積・活用することが厳しい中で、自前に対応できないことは他力に頼らざるを得ないという状況が既に訪れているという認識です。

このような中、CDITには技術力バンクとして直轄の相談役になってほしいと思います。受注業務などを通じて整備局等の担当者との関係を築くこと、何でも相談できるような間柄になることをめざしてもらうとともに、技術的な課題を解決するためのパートナーであり続け、整備局等とCDITとの間で技術力を高め合っていただくことを期待しています。

最後に、私が所属する組織も同じハード系の財団法人ですが、CDITとSCOPEがそれぞれの得意分野を活かすことによって産学官各方面から頼りにされる存在になれるよう、お互いに切磋琢磨していければと考えています。